

## 千里地理通信

関西大学地理学研究会会報 第65号

Newsletter of Geographical Institution, Kansai University

## 琉球リンク

高橋誠一

沖縄の今帰仁城をはじめて訪問したのは、1974年、新婚旅行の時であった。那覇からの観光タクシーで訪問、その日は名護市内の小さなホテルに泊まった。浴室にヤモリがいたことを覚えている。

古代日本の朝鮮式山城を卒論のテーマとした経緯もあって、立派な城だと感激し、まだ見ぬ古代朝鮮の城郭への憧憬も抱いた。累々と連なる石垣越しに見る深い緑と北方のサンゴ礁の白色、翡翠色と紺碧の海もまた目に焼きついた。しかし、この地が私にとってきわめて身近な場所になるとは夢想だにしなかった。20年が経過して家族で訪れた時、娘たちは歓声を上げていたが、自身はわりあいさめた目であった。このときはまだ琉球を研究対象にすることなどないと思っていた。

ところが1999年から琉球を研究対象とするようになって、事情は一変した。今帰仁村歴史文化センターの仲原弘哲さんからいろんなことを教えてもらって、城に近接した集落が海岸に移動したという論文を書き、2003年にまとめた『琉球の都市と村落』にも収録した。この本を紹介してくださった沖縄県埋蔵文化財センターの山本正昭さんから、今帰仁の宮城弘樹さんが連絡をとりたがっているのでもろしくとの一報が入った。

宮城さんからの電話は、私の推定した旧集落跡からかつての屋敷遺構が出土している。世界遺産に登録されたことをうけて、地元ではボランティアガイドの養成講座を開催しているが、講演に来てほしいということであった。那覇空港で宮城さんと玉城靖さんに初めて会って、今帰仁城の発掘現場へ直行、その夜は、お二人と名護市内で飲んだ。

翌夕の講演会場に行って驚いた。なんと昨夕の店から豪華な花束が届いていた。多くの聴衆の方に、琉球の都市と集落について話し、今帰仁城だけではなく海岸の今泊集落もまた世界遺産に登録されるべき重要性を持っていることを熱く語った。地元の方にむかってその地域のことを称賛するのであるから、話すほうも聞くほうも快い雰囲気となった。おかげさまで好感を抱いてもらったようである。その後、再度の要請で講演をさせてもらうことにもなった。

関西大学のCSACのシンポジウムを沖縄で開催したときには、巡検コースにも選んだ。また、2007年の地理学実習の合宿調査も今帰仁村でやらせてもらった。このときには村の全面的な協力をいただくことになった。

実は2007年の実習は、伊東・野間両先生の担当であって、私はフリーの立場で参加させてもらい、今泊集落班の景観調査を側面から助言する一方、個人的に土地所有の面から琉球時代の集落移転のことを調べていた。その際、宮城さんから、せっかくの機会だから地元の人に話をと言われて公民館で講演させていただいた。言わずもがなのことではあるが、いただいた講演料は学生諸君とのコンパに寄付をした。

このときの集落景観調査をもとにして書いた論文は、今帰仁村の文化財調査報告書に松井幸一君と松井僚平君との共著論文として収録していただいた。また、教室名を記載した景観図は、観光客用のガイドマップとして配布されている。関西大学の宣伝にも一役かっている？と自負しているのだけれど。

このような経緯もあって、ありがたいことに、2010年から今帰仁城発掘整備委員会委員に加えてもらうことになった。せっかくメンバーに入れていただいたのであるから、石垣の改修工事が不備であるとか、掲示板設置工事の見積もり額が高すぎるとか、いろんなイチャモンをつけさせてもらっている。関西人はうるさいなあと他の委員の方から思われているであろう。2010年12月に鹿児島県伊仙町教育員会の新里亮さんからメールが届いた。文化庁伝統文化課の総合活性化事業委員の依頼であった。宮城さんの推薦らしい。喜んで引き受けさせていただくことにした。

思い起こせば、2007年のCSACシンポジウムで今帰仁村を訪れた日の夜に、那覇市内の居酒屋でベトナム国家大学の先生方と集中講義の約束をしてハノイへ行った。それがきっかけとなってハータインさんが関西大学大学院に留学、彼女は2011年3月にめでたく学位を取得して帰国、ホアさんも一年後に留学。

なにげなく観光旅行で訪れた今帰仁が、これほど私にとって親密な地になっていったことを考えると、人や地域との出会いというのは不思議なものだと痛感する。その背後には琉球の神々によって次から次へと連鎖していく環があるように思われる。

実はこの原稿、2011年6月15日に書いた。明日から、松井幸一君と今帰仁村古宇利島の調査に行く。またまた環が連なっていくことであろう。(本学教授)

## Contents

Page 1 .....  
巻頭言  
琉球リンク  
高橋誠一

Page 2 .....  
春の一泊巡検報告  
牛窓・備前・赤穂  
梅田真吾

学窓から  
関大地理OB・OGに  
お願いしたいこと  
中西 浩

Page 3 .....  
卒業論文・  
修士論文一覧  
今後の研究会行事

Page 4-5 .....  
研究ノート  
ネパール茶業の  
現況と課題  
—東ネパール・イラム  
郡茶業の特色—  
Gurung Roshan

Page 6 .....  
卒業生だより  
21世紀のKey bed  
下河敏彦

Page 7 .....  
教室だより

Page 8 .....  
随想  
フィールドが人を  
選ぶのか？  
松本博之

新入会員より  
Page 2-3,6

新院生紹介  
Page 6-7

百竹 美晶

地域環境学専修の内容に興味を持ったため、この専修を希望しました。出身は大阪府です。環境問題や地域における問題などを勉強していきたいと思っています。

石崎 遼

大阪府の藤井寺というところから来ました。地理学では主に政治や宗教、村落といった内容と合わせて学びたいと思います。また観光地理なども少し興味あります。3年間よろしくおねがいします。

海野 夏実

初めまして。出身は香川県です。高校で地理は選択していませんが、都市・観光地理学、地域開発などに興味があり、また専修の雰囲気良かったので、この専修を選択しました。よろしくおねがいします。

岡部 なつみ

地域環境学コース2回生の岡部なつみです。私が地理学を選んだ理由は、高校の地理がとても好きだったからです。大学の地理学では、高校とは学ぶことが全然違うこともわかっていますが、全く無関係ではないですし、好きなことを大学でも続けていきたい、と思っています。単純に旅行や散策(?)も好きなので、ちょっとぶらぶら出掛けたときにも地理学的な視点を持って楽しめたらいいなあ、とも思っています。これからよろしくおねがいします。

梶原 千朝実

はじめまして、梶原千朝実と申します。大阪府堺市の出身で、一時間半ほどかけて大学にきています。高校で地理は選択していませんでしたが、都市地理学や観光地理学に興味があったので、地理学教室を選択しました。よろしくおねがいします。

勝部 友恵

初めまして。私は兵庫県西宮市出身です。地理はあまり得意ではないのですが、1回生の時に様々な授業を受け、地理学とは幅広いことが学べる学問であり、とても興味深く感じたので地理学教室を選びました。特に環境問題や地域について関心があります。よろしくおねがいします。

5月28・29日に牛窓・備前・赤穂方面に一泊巡検に行ってきました。朝早くの新大阪駅に誰一人遅れることなく集合し、総勢45名が大型バスに乗り込み出発しました。しばらく自由時間でしたが、途中から目的地について事前に調べたことを説明しました。資料に目を通しながら説明を聞いている時間は、車酔いする者にとって辛い時間でした。

はじめに訪れた長島愛生園歴史館では、ハンセン病に関するビデオを見た後、当時の収容患者の生活を物語る展示物や建物を見学しました。また長島に入る時に通過した邑久長島大橋が、架橋されるまでに相当の苦労があったことを知りました。

昼食は牛窓オリーブ園で海やオリーブ畑を見ながら弁当を食べる予定でしたが、あいにく雨が降っていたためバスの中で食べました。昼食後は、朝鮮通信使の寄港地であった牛窓の町並みを見学し、備前片上の九州耐火煉瓦工場では耐火物製造の過程を見せていただきました。耐火物を加工する時には、ダイヤモンドが使われているようで驚きました。

工場見学の後にはひたすら降り続く雨の中、日生へ向かいました。日生では日生加子浦歴史文化館を訪れ、日生は漁業で成り立ってきた町だ

ということを知りました。ここで一次解散になり、2回生はそのままバスで大阪へ帰りました。雨は降っていましたが、海は穏やかで無事フェリーに乗り込むことができ、瀬戸内海に浮かぶ日生諸島の多島美を感じながら頭島へ向かいました。頭島と鹿久居島は、それほど離れていないので橋が架かっていましたが、本土と鹿久居島は相当離れており、橋を架ける計画の大きさがわかりました。

頭島に到着すると荷物だけ車で運んでもらい、歩いて宿に行きました。夕食は特産のシャコが出てきましたが、殻を剥がすのに苦勞する人が多いようでした。夜は、静かに飲むグループも歌いながら飲むグループも盛り上がっていました。

2日目は、頭島を見学してから島を出る予定でしたが、土砂降りの雨が降り続いていたため、海上タクシーですぐに日生港へ向かいました。そこから電車で赤穂へ移動しました。赤穂では、赤穂歴史文化館で赤穂についての説明を受け、館内を見学して解散しました。

2日間通して雨に降られ、予定通りに進まないところもありましたが、今まで全く知らなかった地域を調べて、実際に訪れることができたのは良い経験になりました。(本学3回生)

学窓から

関大地理OB・OGにお願いしたいこと

中西 浩

今回の東日本大震災で今後の日本は激変し、社会・経済環境も大きく変容すると予測されます。社会面では、これまでのかなり目先だけの自分中心の個人主義的な社会への偏りから、思いやりと助け合いの社会、または人間関係中心文化の社会に回帰すると考えられ、経済面ではデフレからスタグフレーションに向かうと思われる。このような変革時点においては、私は的確な未来予測と先行管理が出来る優れたリーダー、優れたパートナーを見出し、その指導を受け、また互いに異なる視点を打ち出すことにより、今後の活路を開けるものと考えています。

一人では困難なことも、一人一人皆で集まれば大きな力になることはよく言われていることであります。毎日TVを見ていても、無名の方々が被災者を元気づけ、独自の工夫で支援されている映像には心打たれます。関大地理の人脈でも、尊敬する先生がご夫婦とも福島のご出身で、学友や知り合いの方が被災され、また不自由なこととお聞きしています。

私は学部・院修了以来、病気であまりOB・OGの方とは行き来していなかったのですが、この際関大の現役・OB・OGのネットワークを

大きくするべきだと思い至りました。卒業・修了後ハッピーな人、自分の理想とは程遠く不本意な環境にいる方、それぞれの道を歩んでおられますが、共通するバックグラウンドは千里の関大地理です。かつてある人に関大地理の弱点は、OB・OGがしっかりしていないからだと言われました。しかし、誰しも目先や身の回りのことや、より良き近未来像の達成のため精一杯で、とても後輩の面倒や気持ちのゆとりがないのが現状です。その後輩達に先生方は学校で教育をされています。学問の知識は学校で、生活・処世の知恵はOB・OGが与えることが出来ます。相当数のOB・OGが各分野でご活躍のことと思いますので、千里を中心に、身近な同級生や仲良しの二、三人から連絡し合い集まろうではありませんか。そこで生まれる連帯と助け合いが、仏教でいう「利他の心」です。行為の目的を周囲に置けば自分に跳ね返ってくるものです。その中から関大地理の、もう一つの魅力が生まれてくると確信します。私は若者が元気でない社会は発展性のない、また将来性のない社会になると常々考えております。

(2005年 博士課程前期課程修了)

## 卒業論文・修士論文一覧 (2011年3月卒業・修了生)

## &lt;卒業論文&gt;

- 井上ひろほ 東大阪市の製造業の実態と高井田地域のまちづくり  
井村 幸 大阪市内における商店街の活性化に関する地理学的考察  
—千林商店街周辺地域の事例として—
- 岩井 友里 文学作品にみる大阪  
植田恵里香 受け継がれていく奄美大島の八月踊り  
岡村香寿美 箕面川溪谷の森林植生の現状  
上地 真由 大阪中之島の変遷 —土地利用変化を中心として—  
河野 茜 庄内地方における女性鮮魚行商「あば」の軌跡 —生きる糧から生きがいへ—  
鈴木 隆洋 地方都市における公共交通の在り方についての地理学的考察  
—富山市の交通戦略を事例として—
- 土井 康子 盛り場と若者 —大阪・ミナミを中心として—  
中岡 陽香 茨木市域にみられる竹林の変遷と拡散の過程  
羽原 康雅 岡山県砂川上流域の崩壊地形の区分と分布の特徴  
松尾 智也 台湾統治下における製糖業の発展  
吉川 沙織 ラオスの観光の近年の動向と課題 —ビエンチャンを事例として—  
吉川 悠紀 大和川下流左岸地域の水害と地形  
米 恵理佳 羽曳野市駒ヶ谷地区のぶどう栽培の現状と新たな動き  
竹下 裕隆 里山における地元住民とアウトサイダーの交流  
—「能美の里山ファン倶楽部」を事例として—
- 飯野 茉尋 天神橋筋商店街の変容 —天満天神繁昌亭の影響—

## &lt;修士論文&gt;

- 佐藤 ふみ 奄美大島中部北部地域に見られるビーチロックの形成年代と堆積環境  
松田 邦廣 大都市圏の縮小に関する地理学的研究  
向井 浩之 京阪神大都市圏における外国・外資系企業の立地特性  
熊 篤 大阪府安威川流域に見られる1960年代以降の都市化と水害リスクの増大  
齋藤 鮎子 餃子から見る中国・日本食文化の融合と創造 —宇都宮を中心として—

河村恭行  
新2回生の河村恭行です。出身は大阪市でめっちゃ都会に住んでます。サークルは入ってなくて、週4〜5でお酒の配達をするバイトをミナミ(道頓堀)でしてます。地理学教室に入ったのは最初は日本史専修に入ろうと思ってたんですが、日本史の授業を受けてみて自分が考えていたものとは違い、迷ってた時に、高橋先生の学びの扉を受けて、地理の視点から歴史を見ることに興味を持ち、地理学を選びました。これからよろしくお願います!!

木場隆弘  
地理学専修2年の木場と申します。兵庫県伊丹市から通っています。私は高校時代に地理Bを履修していて、その内容がとても面白いものだったためもっと深く学ぼうと思い地理学教室を選びました。よろしくお願います。

後藤修平  
出身は石川県の七尾市です。今は阪急のアルバイトをしていますが、中学高校時代はバドミントンをしてたので少し体力もあります。旅行したり、ぶらぶら歩くのが好きで、地理学が最も自分に合っていると思ひ決めました。

後藤選弥  
舞子高校出身の後藤選弥です。関大ではKUBAというバドミントンのサークルには入っています。高校では環境防災という科でした。ここはすごく防災に特化した学科です。だから、地理学では防災とからめて勉強できたらいいと思っています。

篠崎淳平  
文学部2回生、地理学専修の篠崎です。僕は、広島県呉市の出身です。よろしくお願います。地理学教室に入った理由ですが、地理学に興味があり、特に自然地理に関心があつてフィールドワークなど野外での活動もあるとのことなので楽しそうだなと思ったので入りました。

## 今後の研究会行事

関西大学地理学研究会事務局

## 1. 秋の日帰り巡検

恒例の秋の日帰り巡検を下記の要領にて実施します。卒業生の皆さん、現役学生の参加をお待ちしています。

- テ — マ: 神戸市街地の今を歩く (雨天決行)  
日 時: 平成23年10月30日(日)10時00分~16時00分(三宮駅付近で解散予定)  
集 合: 阪急三宮駅東口の北側広場 (さんきたアモーレ広場)  
費 用: 集解散場所までの交通費と昼食代  
コ — ス: 三宮駅 → 生田神社 → 関帝廟・本願寺神戸別院 → ハーバーランド<昼食> → 南京町の中華街 → 神戸港震災メモリアルパーク → 元町・旧居留地 → 三宮駅  
連 絡 先: 電話または電子メールで竹下 (電話: 090-5682-9957 メール: b38622ht@yahoo.co.jp) まで。

## 2. 地理学研究会第98回(研究例会)

- 日 時: 2011年12月10日(土)  
会 場: 関西大学千里山キャンパス 第1学舎A 301教室  
講 演: 舟越寿尚(関西大学・博士課程後期課程) 多文化都市シドニーの商業地とコミュニティ  
森本英揮(2006年博士課程前期修了) 日本列島の地形発達に係わる地殻変動の推考  
野間晴雄(関西大学・教授) インド亜大陸におけるネパール地域歴史文化の特異性  
—パハール、テライ紀行—

\*なお、例会の冒頭で本年度の広島県呉市における実習調査の報告を予定しています。

また、例会後は第1学舎A棟の1階にある食堂で、懇親会(参加費用:2,000円)も計画しています。

## ネパール茶業の現況と課題 —東ネパール・イラム郡茶業の特色—

Gurung Roshan

### 1. はじめに

本稿の目的は東ネパールのイラム郡における茶業の現況を明らかにすることである。中国で誕生した茶は、日本をはじめ東アジアで長い間飲用され、16世紀から海路でヨーロッパへ渡る。その後、東アジアに限られた飲料が全ヨーロッパに広がろうとする。さらに、時間の経つにつれ、イギリス本国のみならず、イギリスの植民地地域にも広がっていく。その結果、19世紀の半ば頃から、インドで飛躍的に栽培が拡大する。さらに、1856年にダーズリンにおける茶栽培の開始後、そこの気候によって中国茶の同じ原種で、高級茶が生産できるようになり、ダーズリン茶といったブランドが誕生し、茶の世界で新しいチャプターが加わる。

イラムはネパールの東の端のメチー県 (Mechi Zone) に位置し、標高およそ1200m前後のヒマラヤ山地に形成されている人口約1.5万人ほどの町 (中心部) で、イラム郡 (district) の主邑である。イラムはダーズリンから山越えの道ではわずか50kmほどであるが、外国人にはこのルートは認められておらず、いったんテライ (平地) の標高40mから下がって、ここから一気にヒマラヤ前山を駆け上らねばならない。このようなイラムは気候・地形・標高の様ざまな面からダーズリンと非常に類似している。そのため、イラムでダーズリン・ティー・エステートのレプリカとして茶エステートを形成した。



写1 イラムの最古の製茶工場、1878年創立 (撮影者: ロシャン)

ラムに茶園が設立されたことに始まる。

ラウル (2004) によると、中国は茶の祖国であるため、ネパール政府は中国から純粋な茶 (*Camellia sinensis* var. *sinensis*) の種子を持ってきてイラムのガウダ (Gauda) で栽培を開始したと主張している<sup>1</sup>。その2年後の1865年、同じイラム郡のソクチム (Soktim) でも茶栽培が開始された。当時の面積は、アジアの中で最も早い時期にあたる。初めは、ネパールにおける茶栽培が個人的にイラムで49ha、ソクチムで210haで開始された。だが、ネパール人の茶に関する知識不足や技術不足のため、茶栽培の発展は遅々たるものであった。その後、1959年、ジャパ郡の地主たちがジャパで民間初のブッダカラン茶エステート (Buddhakaran) を設立する<sup>2</sup>までの期間のネパールにおける茶栽培に関する統計は現在のところ得られないが、86年間大きな増加はみられなかったと推定される。ただし、1966年には、ネパール政府は茶業の将来の発展を考え、ネパール茶開発有限会社を設立した。このように、ネパールでは茶栽培の開始からおよそ1世紀後、ネパールの茶が再び立ち上がろうとした。

現在、イラム・エステートの下にイラム・ソクチム・カンニヤム・トクラ・バルネ・チリンコートゥ、ワラダシという7つの茶園が所属する。さらに、ネパールでは茶エステートが140にのぼり、面積は17,127haを占め、製茶工場が40にのぼる。その中で、25がCTC<sup>3</sup>と15オーソドックス (Orthodox) 工場がある。そこで、年間およそ16,607,555kg茶が製造されている<sup>4</sup>。

イラム郡では、とくにオーガニック (Organic) 茶が製造され、総生産のおよそ9割が海外へ輸出されている。

表1 ネパールにおける茶業の現況 (2009/2010年)

群名	茶エステート		小規模農民		合計		
	栽培面積 (ha)	生産 (kg)	農民人数	栽培面積 (ha)	生産量 kg	栽培面積 (ha)	生産量 Kg
ジャパ (Jhapa)	6107	9248624	871	2889	4749784	8996	14048408
イラム (Ilam)	1347	491527	4935	3783	1097423	5130	1588950
パンチュタル (Panchthar)	382	89502	847	433	140298	815	229800
ダヌクタ (Dhankuta)	219	50089	387	205	72986	424	123075
テヘラトゥム (Tehrathum)	23	5567	402	161	40690	184	46257
その他	952	55002	349	93	35998	1045	91000
合計	9030	9940311	7791	7564	6187279	16594	16127490

資料: Tea Coffee National Tea and Coffee Development Board, Kathmandu, Nepal, 2010. P.8.

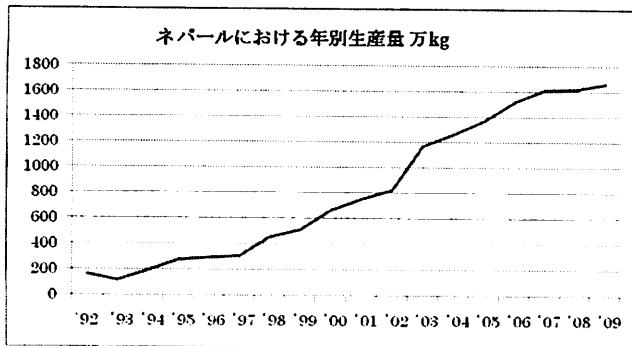
### 2. ネパールにおける茶エステートの開発と現況

イラムに形成された茶エステートは、ネパールの茶園の中で最古の茶エステートである。イラムにおける茶栽培の開始に関して2つの民間伝承がある。その1つは1863年、当時の首相ジャンガ・バハドゥル・ラナ (Janga Bahadur Rana) が中国を訪問した時、中国の皇帝から茶の種子をもらい、その種子を用い、イラムで茶栽培を開始したと言われている。その他は、当時のイラムの地区長官ガジャラジュ・シンハ・タパ (GajaRaj Singh Thapa) が1863年にダーズリンを訪問し、そこで多種の茶を試飲した。彼は茶を非常に愛好し、そこから茶の苗や種子を持ち帰り、イラムで栽培を始めたという。イラムにおける茶栽培の開始の契機はいずれにせよ、1863年にイ

表1を参考にすれば、ネパールの茶栽培面積は16,594ha、総生産は16,127,490kgである。その中で、茶エステート形成が9,030haで、総栽培面積の53.4%を占め、小規模農民たちが45.6%、7,564haを占める。つまり、小規模農民の茶園が総栽培面積の約5割を占める。これはネパールにおける茶業の特色の一つである。インドのアッサムやダーズリンとはまったく状況が異なる。ここで注目すべきことは、インドの場合は小規模の茶栽培農民がいないと言ってもよい。さらに、ネパールにおける茶エステートが茶を9,940万311kg生産し、総生産の61.6%を占める。小規模農民たちの生産の場合は618万7,197kg生産し、38.6%を占めるにすぎない。それは栽培面積に比べると生産力は少ない。



また、1965年に茶の栽培が開始されたジャバ郡の茶栽培面積や生産力は非常に高い。ジャバ郡の茶栽培面積や茶生産とジャバ郡以外の5郡の茶栽培面積や茶生産を総合し、比べてもジャバ郡が上回る。つまり、現在ジャバ郡における茶栽培が総生産の54.2%を占める。ジャバ郡はテライ（平地）であるため、気候が暑いので、茶の生産率が非常に高い。ジャバ茶エステートが茶の総生産の87.1%を占める。イラムでは生産量が少ないが、かなり品質の高級茶が生産できる。ジャバでは茶が大量に生産できるが、品質があまり良くない。ここで、ネパールの茶業をインドの茶業と比較すると、ジャバ郡は大量生産のアッサム茶エステートにイラムは高級茶の生産地ダージリンにあたる。



資料：Tea-Coffee National Tea and Coffee Development Board, Kathmandu, Nepal, 2010, p.63.

図1 ネパールにおける年別茶の生産量(万Kg)

ネパールでは茶の栽培がかなり早く始まったが、実は、1990年代から茶栽培に参加する農民が大幅に増加する。そのため、ネパール人らも茶に関する統計が保管するようになる。ネパールにおける茶の生産量に関する統計が1992年から得られる。この年、茶の生産量は161万4千kg記録されている。その翌年、生産量が少し落ちるが、その後茶の生産量がずっと向上している。さらに、1995年からネパールにおける茶の生産量が飛躍的に伸びる。この年茶の生産量が273万7千329kg記録されている。これは前年に比べると40.54%も増加する。その後もネパールにおける茶の生産量が急激に増加し、1997年から2003年までおよそ10%の増加率を保つ。その後、2003年から2009年までも生産率が増加するが、前年の2003年ほどは伸びない。

### 3. ネパール茶業の特色

ネパール初のイラム茶エステートは民間茶園である。最初は植民地の一部であったダージリンを模倣した茶園として開発しようと考えたが、成功はしなかった。ネパールでは大規模な茶エステートよりも小規模の茶園あるいは個人的に茶を栽培される農民が圧倒的に多い。しかも茶栽培地域は東端部のメチー県に集中している。2010年の資料によると、個人的に茶を栽培する農民の人数は7,791人におよぶ。1990年まで、メチー県のほとんどの農民たちが稲作・トウモロコシ・カルダモンを栽培していたが、その後、茶栽培に転換するようになった。その主な原因は、茶樹は樹齢が長く、利益が継続することである。また、世界市場での、ヘルシー志向の茶ブームによってネパール茶も注目されるようになったことも要因である。

ネパールでは地域によって、茶が栽培や製造されている。イラムという高地ではほとんどオーガニック茶が製造され、その総生産の9割くらい輸出している。その反

面、ジャバ郡の場合は、100%CTC茶が製造され、総生産のほぼすべてが国内で消費されている。すなわち、ネパールとインドのエステートの関係が、イラム茶はダージリン茶に、アッサム茶はジャバ茶に対比される。

### 4. ネパール茶業の課題

ネパール茶業の主な問題は資金や電気不足である。そのゆえに、道路の整備もその中の一つといえる。茶エステートはほとんど奥地に位置しており道路整備も不備で、茶葉の運搬には多く乃問題を抱えている。さらに、ネパール茶の宣伝不足も大きな課題である。ネパールは地形環境も多様であり、さまざまな種類の茶の製造が可能である。とくに、イラム茶は樹齢がダージリンよりも若いいため、品質や単位面積当たりの生産性はダージリンよりも高い。だが、宣伝不足のため、ネパール茶の存在自体が国際市場では知られていない。カトマンズの土産物店ではネパール・ティーとして販売されている。その他、政治的な不安定や不公正もネパール茶業の大きな課題である。ストライキがたびたび起こり、茶の栽培や製造に悪影響を与える。農民の技術不足、労働力不足、茶業に所属する人々の間の協同組合不足もネパール茶業には残念なことである。

ネパール茶業のもっとも大きな課題は、研究部門の弱さである。ネパールでは茶栽培が開始され、およそ150年間経過するが、行政部門としての茶業局はあっても（コーヒーといっしょに）国立の茶業試験場はまだない。ネパールでは多くの茶の種類が導入されていても、研究センターがないため、茶の品質向上が不可能である。さらに、海外輸出前の検査も不十分である。

本稿では、ネパール茶業の現況・特色とその課題を明らかにした。ネパール茶業は特に、イラムは気候の面からかなり高級茶の生産地であり、茶樹もダージリンより若いいため、ダージリンよりも高級な茶の生産の潜在可能性を有している。一方、テライのジャバ郡はアッサム種を中心としており、茶の面積当たり生産力が高い。このような多様性はネパール茶業の将来性に明るい光を投げかけ、将来性は十分ある。

(文学研究科文化交渉学博士課程後期課程)

<sup>1</sup> Rawal KaranKumar *Chiya Herda Sun Jasto-1 Asia* Publications Private Ltd. BagBazar Katmandu, Nepal, 2004, p.2.

<sup>2</sup> *Tea Plantation Handbook*, Himalayan Orthodox Tea Producers Associations-Nepal (HOTPA), Sinamangal Kathmandu, Nepal, (出版年次不明), p.1.

<sup>3</sup> CTCとはCrush (Cut), Tear, Curlの略で、短時間で茶成分の抽出が出来るように、最初から細かい茶葉を作る製法。

<sup>4</sup> *Tea Coffee*. National Tea and Coffee Development Board, Kathmandu, Nepal, 2011, p.1.

### 参考文献

- 1) Tea Coffee National Tea and Coffee Development Board Kathmandu, Nepal 2010
- 2) Tea Farmer Newsletter Tea Sector Service Centre Jawalakhel Nepal, 2009 February
- 3) Tea Farmer Newsletter Tea Sector Service Centre Jawalakhel Nepal, 2011 June
- 4) Subedi BadriRaj Adhunik Chiya Kheti Prabidhi Shri Kanchanjangha Bahuuddeshiye Sahakari Sastha Ltd. Fikkal Ilam, 2000

文学部2回生の柴原悠司です。出身は滋賀県で、大学には電車通ってます。小学校から高校まで野球をやってました。趣味はスポーツ観戦と旅行です。地理学教室には、都市システムに興味があったので入りました。

中村圭佑

地理学専修の二回生、中村圭佑です。京都府舞鶴市の出身で、現在大阪で1人暮らしをしています。趣味は野球です。(特にプロ野球が好きです。)地理学専修を選んだ理由は、高橋先生の授業を受けて地理は面白いと思ったからです。特に歴史地理学に興味があります。また、幅広く学べるということにも地理の魅力を感じました。これからよろしくお願ひします。

福岡明恵

出身は大阪府泉佐野市です。高校では日本史を履修していて、歴史に興味があったのですが、去年地理の授業を受けて地理的に歴史を研究してみたいと思って地理学教室を選びました。今は歴史地理だけでなく、都市地理学、政治地理学など地理学の分野で色々なことを学んでみたいと思っています。よろしくお願ひします。

細野佑樹

趣味はカメラと一人旅です！ラーメン巡りもしてるのでオススメのお店があれば教えて下さい！学祭実行委員と写真部の掛持ちしてます。地理の先輩とも仲良くしたいです！皆さんよろしくお願ひします。2回生地理学科盛り上げます(∩∩)

新院生紹介

博士前期課程

徐 笠凡

徐笠凡です。中国の遼寧省撫順市から来ました。もう日本に来て6年半、日本のこと大好きになりました。特に大阪。研究内容は「ごみ問題」で、土の化学的な成分の分析に現在興味があり、風景の説明を目的としています。そして、東北大地震で被災されたみなさん頑張ってください。できることを応援します。

2011年は自分にとって大きな節目となるという想いがいくつか募り、千里地理通信に思いをはせることになりました。その想いに至った背景には、もちろん東北地方太平洋沖地震(東日本大震災)があります。日本の地形がどのように形成されたか、防災に対する考え方がどうあるべきか、これから様々なことが見えてくるでしょう。また、バブル世代の私は、モノがない、電気がないという事態がおこるなど考えもしなかった。地球科学的にも社会情勢的にも、日本の21世紀は実質的に2011年3月11日にはじまったのではないかと思えたほどでした。

私が大学に入学した頃、図書館の新着コーナーに「新編：日本の活断層」がありました。文学部(当時)事務室に卒論を提出した3日後の朝、兵庫県南部地震(阪神・淡路大震災)が発生しました。そして、地理学教室の門戸をたたいてちょうど20年目の今年、東北地方太平洋沖地震(東日本大震災)が発生しました。むしろ2000年から2001年に変わったときには驚くほど変化がなかった。

私は今でこそ地形解析や地質調査の仕事に携わっていますが、その興味の原点は、自然科学や地球科学的なものではありませんでした。

はじめて受けた地理学の講義は、木庭先生の地理学研究法でした。そこで、地理学が多彩であること、現地で考えることが基本であることなどを学びました。そして、高橋誠一先生の一般教養「人文地理」の講義で、「地図は悪夢を知っていた」という伊勢湾台風の被害と地形との関係を学んだ時、「ああ、これだ」と膝をポんとたたき想いがしました。これはライフワークにできると。地図帳や地球儀を眺めていると時間を忘れる少年でしたので、自分で調べ得た情報や考えを地図に表現することで「飯が食える」と。

就職してから数年は、活断層関連の仕事に従事しました。折しも情報技術が飛躍的に伸びる時代でもあり、物理探査・地震探査技術を用いた研究や、地球科学的視点からの活断層研究も発展していきました。そのなかで、活断層は地表に明確な崖・リニアメントを残すとは限らない、むしろ、地殻のストレスの通り道としての結果であって、地表に出なくても活断層が潜んでいるという考え方に発展していきました。ですから、空中写真判読にあたっては、地下数十km以上に潜む活断層までを考える、高度な空

間思考が求められるようになりました。2000年代半ばからは、レーザー測量という画期的で超高精度の測量手法の台頭により、学生時代から手がけてきた地形分類も新境地に入っています。

ただ、ここ数十年は、自然災害はもとより「経済災害」とも言うべき不況風強烈な時代でもありました。私が4回生のときが元年と言われた「就職氷河期」も厳しさを増していると聞いています。歴史を紐解くと、大地震や火山噴火の直後は経済活動がますます疲弊する傾向があります。

さらに「情報洪水」もとても厄介な「災害要因」です。圧倒的かつ玉石混交な情報が絶えずあふれているだけに、その情報を分析し価値あるものを抽出すること自体が仕事になってしまいました。また、コンピュータ・シミュレーションの多用により、scientificであるということは、「数値化すること、計算すること」という認識ができあがってしまっています。先に書いた経済災害と情報洪水に、我が強く不器用な私は何度か振り回されました。

しかし、ここまでなんとか踏みとどまっていたのは、地理学教室で受けた薫陶がベースになっていたのだろうと、感謝しています。やはり、自然現象でも社会現象、歴史の断面でも、その現場を歩き、定性的なモデリングを構築する。机上の空論ならぬ「地上の正論」は、地理学の本懐であると思うのです。

今年、私の勤める同業者に、関西大学で自然地理を学んだ後輩が入ってきて、地震調査で活躍ぶり耳にしました。彼女もある意味私と同様に、時代の節目となる大震災直後に社会人になりましたので、地球科学をはじめ、いろんな分野でドラスティックな変革を目の当たりにして、貴重な体験をすると思います(もちろん私もですが)。文学部という背景もあって、地質調査・コンサルタント業界に技術職は出てこないのかとあきらめかけていましたが、このような活躍ぶりをみると、私の20年に少なからず意義があって、地理学教室の「知層」のなかに、明るい色のKey Bedをみつけた気持ちがありました。

関西大学地理学教室の知層も、ますます厚みと価値を重ねていかれると思います。ひとりのOBとしても後輩の方々のKey Bedとなれるようにしたいものです。(1995年学部卒業)

## 教室だより

## ■学生数

平成23年度当教室新入生は、新2回生16名(男子9名・女子7名)、博士課程前期1年生4名(男子1名・女子3名)であった。学部生63名、院生18名(文化交渉学の院生6名を含む)、大学院研修生の矢野さんを含めると総計82名となった。4月21日(木)には新入生歓迎コンパをフランススペースで開催した。

## ■春の一泊巡検

恒例の春の一泊巡検は、5月28日(土)、29日(日)に下記の要領で開催された。テーマ：備前・牛窓・赤穂—自然・産業・まちなみ・観光—。参加学生：地理学地域環境学実習を履修する3回生、それに2回生、博士課程前期1年生ほか。集合場所と時間：7時50分集合、新大阪駅団体待合室付近。コースの概略：28日JR新大阪、国立療養所長島愛生園歴史館(ハンセン氏病療養所見学)、錦海干拓地の土地利用、牛窓オリーブ園(昼食)、牛窓まちなみ見学、九州耐火煉瓦工場、日生加子浦歴史文化館、日生港(一次解散)、宿泊者は船で頭島へ。29日海上タクシーにて頭島出発、日生港、市立赤穂歴史文化館、帰路。引率：実習担当者(伊東・野間)。参加者数45名、うち日帰りは17名。

## ■課程博士申請論文公聴審査会

7月16日(土)10時30分～11時30分まで尚文館501教室にて、上野裕さんの課程博士申請論文「都市空間形成における地理学的研究—都市の基盤整備事業と空間行動—」の公聴審査会が行われた。参加者は教員4名のほか、大学院生(文化交渉学を含む)及び、修了生の約20名で、活発な議論が展開された。

## ■M2中間発表会

7月16日(土)13時～17時まで地理学・地域環境学教室にて行われた。発表者は地理学専修から、逸本茉莉子、喬成立、廣田琢也、増田妃の4名、文化交渉学専修から、張旭、張立宇の2名であった。

## ■教員の国外出張 2011年4月～8月

野間晴雄：①2011年7月6日～14日、ネパール。グローバルCOE経費による茶園調査。②2011年8月16日～29日、ポルトガル、スペイン、アラブ首長国連邦。私費視察。

伊東理：2011年8月23日～9月6日、連合王国。科学研究費による中心地に関する現地調査。

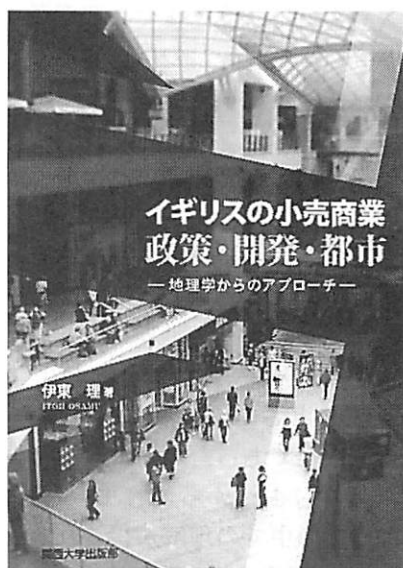
## ■新任非常勤講師紹介

今年度新たに非常勤講師としてご出講いただいた先生は以下の方々である。水田義一(人文地理学を学ぶ)、松井幸一(地理情報システムb)、堀内千加(地理学・地域環境学研究法a)、西岡尚也(M夏季集中講義 人文地理学特別研究)、前迫ゆり(M自然地理学特別研究)。

## ■新刊書紹介

伊東理著『イギリスの小売商業 政策・開発・都市—地理学からのアプローチ—』、関西大学出版部、2011年3月、全360頁、3150円

2006年の3月に関西大学から授与された学位論文「先進国における小売商業の地域的展開—大規模小売商業施設の立地展開と地域政策に着目して—」の一部を加筆・修正するとともに、それ以降の研究成果も含めてまとめたもの。4編11章の、第二次世界大戦後のイギリスにおける小売商業の地域政策の展開と地域小売商業の変化について、地理学の立場から実証的に考察したものである。イギリスの小売商業に関する地理学研究に着手して以来、約15年間の研究集大成。



## ■寄付金へのお礼

渡邊登様より地理学研究会に五千円のご寄附をいただきました。研究会の活動に使わせていただきます。厚く御礼申し上げます。

竹下裕隆

こんにちは。M1の竹下裕隆です。福井市出身で、中日ドラゴンズをこよなく愛しています。この度、学部時代から引き続き野間先生のもとで、勉学に励めることとなりました。卒業では「里山」を取り上げましたが、今後は「金魚」について研究を進めていきます。気合を入れなおして、2年間、頑張っていきたいと思います。

張 肇

張肇です。日本に来てからもう二年半になりました。こちらの生活にも慣れました！日々、周りの日本人の熱心さを深く感じております。ところが、東北・関東地方に酷い地震が起これ、多くの方が被災されました。心からお祈りさせていただきます。みなさん、頑張ってください！私も出来る限り応援差し上げます。関西大学(大学院)は、キャンパスの雰囲気が良いため、入学以降、毎日愉快地勉強しております。特に、地理学のみなさんと一緒に学習している時が一番楽しいです。

李 巍

私は李巍と申します。中国の遼寧省盤錦市から日本に来ました。もう日本に来て二年が経ち、日本のことが大好きになりました。私の研究テーマは、「中国東北部における食文化の変遷について」です。地理学とは各国、各地域の自然、歴史、都市、文化など幅広い対象を研究する学問です。そのため、私は自分が知らないことを何でも考察するのが好きなので、地理学を選びました。

宋 琛

文化交渉学の宋琛です。旅行が好きなので、各地を通っている道路に興味があります。これから歴史地理の視点で東アジアの古代道路整備、及び関連設備に注目していきたいです。よろしくお祈りいたします。

## 随想

# フィールドが 人を選ぶのか？

松本 博之

6月中旬、雨模様のなか和歌山県南部（紀南）の串本町とすさみ町に出かけていた。近頃、紀南へ足が向くようになってきている。このフィールドも私が選んだというより、その場所選ばれてしまったと言った方がいいかもしれない。はじめて串本の地に足を踏み入れたのはもう45年ほど前である。本学の教授でもあった蕨内芳彦先生に連れられて、大学3回生の野外巡検のおりであった。今もそのときの光景が鮮明に思い出されるが、その地へ再び戻ることにになるとは当時予想もしなかった。

それから、5年ほど経ったであろうか、同じ蕨内先生が南太平洋に出かけないかと誘ってくださったのである。3回生の和文献演習のおり、石川栄吉先生の人文地理掲載論文「マオリ族の居住様式」を素材として選んでいたくらいだから、関心がなかったわけではないが、明確な問題設定もないまま、「行けば、また世界が拓けるかもしれない」という先生の言葉に甘えて同行させてもらうことになった。それ以来、オーストラリアの最北端、トレス海峡諸島の周囲9kmほどの小島で暮らす先住民世界に一生関わることになったのである。

最初5年ほどの間に前後3回調査隊として出かけたが、結果的にはその後私の一人旅になり、30年あまりの歳月が流れた。研究テーマをめぐって、それこそ当初逡巡の連続であったが、通奏低音になっていたのはこの地で暮らすには幼子に帰り何を身につけなければならないのかという思いであった。

その人々の生活は、航海・漁労・狩猟といった海での活動ばかりか、熱帯の気象と、何よりも「南東貿易風」を抜きに考えられない世界であった。まさに、潮と風を生きる人々であった。私が身につけるべきことは、彼らがこのような自然を織り込んでどのように世界を成り立たせているのか、日々の生活から歌謡や踊りに至るまで、彼らの表現世界を通して「文化としての自然」、すなわち彼らの地理的想像力を得ることであった。

だが、その過程で超え難い壁にぶつかってしまった。彼らの言葉の世界だけでは、頭の中での理解が得られるに過ぎず、私自身の身体による理解にまで至らない。そこで暮らすとは行為者としてその場にあることであり、いわば身体がその自然と共振しながらその自然を当然視できることであって、頭での理解だけで済む事柄ではない。彼らの言葉から得られる知識を身をもって了解するには、自己の身体性を通して、そこに暮らす人々の言

動や行為を裏打ちする必要性をまざまざと思い知らされたのである。

問題はフィールドにおける自己の身体的経験の深まりである。それを待たなければ、彼らの自然に関する表現を納得することはできない。言葉の上での理解だけでは、ましてや異文化となると、砂上の楼閣を築くにすぎない。そうした身体性を通じた場所の経験の深まりは旅人にも似た調査者には至難の業であり、いわば自分の感受性を試されるわけで、自分がフィールドを選ぶというより、フィールドが人を選ぶ立場に立たされたのである。

そうしたフィールドでの経験が40年ほど前に訪れた紀南へと私を再び導いた。トレス海峡には、日本の地図帳に必ず「木曜島」と漢字で書かれた地名が登場する。そこは明治10年代から第2次大戦まで、欧米世界に高級貝ボタンの材料を供給した真珠貝漁業への日本人の海外出稼地でもあった。そうした日本人の8割近くが紀南の人たちだったのである。

延べ人数にすれば数千にもおよんだ出稼者たちは第2次大戦によってオーストラリアに強制収容され、戦後日本へ送還されたのであるが、すでにその地の人と結婚していた数家族が帰ることを許された。はじめてトレス海峡を訪れて以来、調査地への旅の道すがら木曜島でホテルを経営する串本出身の最後の潜水夫経験者やその二世家族との付き合いが始まった。戦後すでに60年余りを経る過程で、トレス海峡においても、戦前の日本人の存在は風化しつつある。そのことに危惧を抱く混血の二世たちが父親の伝記を作り記録にとどめたいという希望を持ち、それをお手伝いすることになったのである。

3年前の秋、二世たちによるすでに故人となった父親の故郷訪問が実現したのであるが、それに先だって、私が多少の資料収集や残り少なくなられた出稼経験者への聞き取りを始め、紀南への再訪を促されることになった。ただ、私にすれば、出稼史や移民史という過去の机上での復原というよりも、トレス海峡の熱帯の洋上で、激しい潮流と南東貿易風にさらされながら作業をしつづけた出稼者たちの生活、あるいは真珠貝漁業を通しての彼らの地理的想像力に関心を抱いている。それはまた、トレス海峡という身体化されたフィールドが私を選んでしまったテーマと言えようか。

(奈良女子大学名誉教授・本学非常勤講師)

千里地理通信 第65号

2011年9月20日 発行

関西大学地理学研究会

〒564-8680 吹田市山手町3丁目3-35

関西大学文学部地理学・地域環境学教室内

編集担当：高橋誠一 舟越寿尚 竹下裕隆

TEL：06-6368-1121（内線4890：大学院生室）

e-mail：moto@kansai-u.ac.jp/

URL：http://www2.ipcku.kansai-u.ac.jp/~moto/

郵便振替：大阪00970-4-81149